



天歩 2022年 11月 No.184

# 狩浜秋祭り 2022

【暴れまわる牛鬼】

「いい祭やったな。」神輿の宮入後、老いも若きもそんな声をかけ合いながら家路につく。わが集落の祭には「今ひとつだった。」という声があがることはない。それはきっとこの祭が維持されたこと、この地で暮らす幸福に対する感謝の念からくるものだろう。その想いは連綿とつながる生命のリレーに似ている。

10月22日土曜日。実に3年ぶりとなった狩浜の秋祭(春日神社秋季例大祭)を迎えた。コロナ第7波が立ちはじめた6月下旬から神社総代、区長会などの関係者は、祭を「やるか」「やらないか」4箇月先のことなど神のみぞ知るといった半ば空虚の中での数回にわたっての論議は本当に苦しいものがあった。

ふり返れば令和2年は神社修復工事で1年前から祭の中止は決まっていたが、そこにコロナ禍が広がった。そして昨年、次々と姿を変えるウイルスに翻弄され、祭開催の希望はやむを得ず今年に託された。当然、全国どこの地域も同じ状況であったことだろう。修復なった春日神社は昨夏竣工しており、この厳しいご時世で地区の積立はもとより驚くほどの寄附が集まった。狩浜人の神社への想いは、「狩浜魂」とでも言わなければ説明がつかないほど熱いものだとつくづく感心した。しかしコロナに阻まれ、令和の大修理で完成したふるりの産土神の館に市外の氏子たちが参拝できるようになるまでにはまた1年を要したのである。こんな経緯もあったが、私たちの懸念は今年秋祭ができなければ練り(演し物)の伝承が衰退し地域の活力も失われるという危機感であった。来年度、本殿修復計画が予定どおり着工したらまた祭は中止(の可能性があり)となり、4年間練りが寸断されるとしたら…。小学生ならあと2年後には5年生以下が練り経験なしとなる。現在狩浜地区は明浜小在学児36人、中学生は7人である。2年伸ばすことで練り経験者は確実に減ってゆく。そして指導する側の負担は逆に増えてゆく。この地区は子どもの練りの数が多い。近隣の地区では子どもの練りが壊滅的状況のところもあると聞かすが、ここには江戸時代発祥の練りに加え、子どもが増えた時代の比較的新しい練りもある。私たちが小学校の頃は練りに参加できない子どものためにタル神輿まで登場した。だが、ここに来て子どもの数は一気に減った。

本来17人構成の角力練り(甚句)もここ数十年は半分以下になっていた。「危ういなあ…」焦りに似た気持ちは住民も同じだった。しかし、祭はある方がよいけれど何しろ高齢化率46%(施設を除く)を超える当地区である。やはり高齢の方もコロナ感染は恐い。そこで祭前に検査をし、安全を確保することを担保にして祭の実施に取りつけたのである。



【五つ鹿】



【角力練り】

# 3年振りのお祭り

さて、祭までの1か月は特別である。毎夜子どもたちに練りを教える牛鬼組の若者たちはきっと20年・30年前、同じように練習に励んだ自分の姿を重ねている。60歳のわが身でさえも50年前のこの場面がよみがえってくる。そして祭のハレの日、今度は子どもたちが1箇月を共にした兄ちゃん(中にはおじちゃん?)たちの締め込み姿にわくわくドキドキしながら、悪魔を祓い暴れまわる牛鬼に懸命に声援をおくるのである。御船組でもイケメン青年を「〇〇兄(にい)」と女兒たちが慕い、踊りの披露の場を共にした記憶はいつまでも残っているようである。こんな青年になりたい。大人になったら牛鬼をかいてみたい。そんな憧れに近い感情がある種、この素朴な祭の精神的支柱になっていると感じるのは私だけではないだろう。

## 守るものがあり、守りたいものがある

35年ほど前に、とある機関から秋祭の寄稿を頼まれ「秋祭は集落の最後の砦かもしれない」と締めくくった。その厳しい現実が目前にある。だが、遺伝子の刷り込みに似た祭の記憶が子どもたちにしっかりと引き継がれることが、逆に集落の維持につながるのではないかと確信めいた気にさえなる。秋風に鞆がギ〜ギ〜ときしむ音、遠くから聞こえる太鼓や三味線の音、若者たちの雄叫びなど音や独特の空気が体内時計のスイッチを祭モードに切り替えるその瞬間は今も変わらない。祭を通じて同じ時間を共にして、しんどさを分かち合った仲間ができ、上に立つ者は仲間をねぎらう術や年配者から学ぶことを身につける。竹やカズラ採り、牛鬼のかごづくり(骨組み)の共同作業は気持ちをひとつにしていくためである。(ロープやひもを代用すれば簡単なはずだけでも、あえて昔ながらの素材や技術にこだわるのはこんな意義もあるからだろう)。住民はそんな子どもたちや青年の成長を、手放しに喜ぶ。ここには彼らが期待される場所があり、期待に応える場面がきちんと用意されてある。子どもたちへのごほうびである御花(ご祝儀)などは、私には世代間相互扶助システムだとさえ思えてくるのである。やはり先行く人たちが少しずつ創り上げた地域の仕組は、危うくなった地域を維持し守る砦であったのだ。

ここには守るものがあり、守りたいものがある。この2つの幸せがこれから100年の集落づくりにつながればいいと思う。小さな田舎の小さな秋祭は、集客(商業主義)のためではなく一人ひとりが役割を果たし、その一日に全力を尽くす。自らが楽しむためのものだからこそ飾らず素朴で美しい。そんな雰囲気気づいたのか、最近は地域外からカメラマンをはじめ大勢の方が見物に来るようになったが、祭の本旨は今も変わらずぶれていない。

10月23日、日曜日。一夜明けて新しい1年が始まった。誰もがエネルギーを使い果たし、心地よい疲れの中で互いをたたえ合いながら神社境内の片付けが進む。どうかこの1年が集落に暮らす人々にとって幸せでよい年となりますようにと改めて手を合わせた。

【追記】検査では幸い陽性者が出ず、関係者一同安堵して当日のぞんだのだが、お客(接待)を各家庭で工夫し、招く人も最小限、屋外会食を選んだ家もあるなど、対策には苦勞されていた様子である。いつもの祭の姿と日常を一日も早く取り戻したいと切に願っている。

“秋風を切り祓いたる牛鬼(おに)笑ふ” 文・里詩



【牛鬼】



【神輿】



【御船】

# ベトナムで生きる、働く ～ドライフルーツのはなし～



【FUV スタッフ高埜と現地スタッフ】

私たちが暮らすベトナム中部高原のダクラク省は、雨季・乾季からなる熱帯地域でありながら、600～800mと標高が高く涼しいという珍しい気候条件をもった地域です。このためコーヒーやコショウの大産地として有名ですが、実は他の多くのトロピカルフルーツの優良産地でもあり、それらの栽培の北限でもあります。

特にファーマーズユニオンベンチャーの周辺は、果物の魔王「ドリアン」の名産地として近年有名になり、今年から「ドリアンフェスティバル」が開催されるなどベトナム各地から多くの人で賑っています。

ドリアンの他にも、マンゴー・マンゴスチン（果物の女王と呼ばれる、世界三大美果のひとつ）・チェリモヤ（三大美果のパイナップル）と、ダクラク省には美味しいトロピカルフルーツのすべてが集中している、世界的にみても稀有な地域なのです。

標高が高く日射が強いため、日中の気温が30℃を超えることも珍しくありませんが、日が沈むと途端に冷え込み、寒い時期にはなんと15℃近くまで下がります。このような高原の昼夜の寒暖差が、美味しい果樹を育てている理由であるとも言われています。

# ドライフルーツへのチャレンジ

トロピカルフルーツの多くは収穫適期が短く、また熟し始めると果肉がとても柔らかくなるものが多いのが特徴です。このため抜群に美味しいにも関わらず、現状の東南アジアのインフラでは流通させることは簡単ではありません。なので、多くは地元生産者の楽しみとして消費されるだけです。しかし完熟したトロピカルフルーツの美味しさは抜群で、日本のスーパーで売られているものとは全く異なる風味があります。

そこで、目の前にあるこれらのトロピカルフルーツの風味を、どうしたら美味しく遠くまで届けることができるのか…。まずはやはりドライフルーツでチャレンジしてみたいと考えました。また、私たちの乾燥設備は小さいため、逆に本当に完熟した美味しい状態の果実のみを、少しずつ原料として受け入れて乾燥させることができます。

まず、私が暮らす少数民族の森の中で、ある程度既に栽培されており、またドライフルーツに向いているものを10数種類ピックアップしてサンプルの試作を行いました。その結果、ジャックフルーツ、ランプータン、ロンガン、バナナ…などなど。どれもかなり美味しく出来上がりました。今回はその中でも日本人に人気がありそうなのはパイナップルとピタヤ（ドラゴンフルーツ）に的を絞りました。

早速、村の仲間たちと協力して本格的に商品開発するため、改めて森にパイナップルやピタヤの作付けを行っています。パイナップルは既に森の中で自生に近い状態で収穫できるクイーン種、そして大玉で糖度の高いMD2種を作付けしました。ピタヤに関しては無農薬でも病害虫に強いホワイトピタヤを作付けしています。収穫はおそらく10カ月～1年後を予想しています。どうぞ皆さんお楽しみに！（高埜 太之）



【乾燥作業の様子】

# 明浜と台風

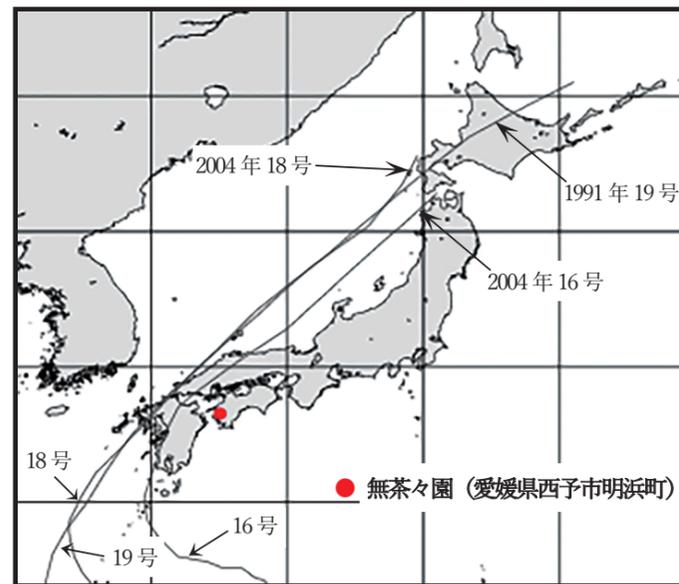
季節も晩秋に近づいて初夏からはじまった今年の台風シーズンも終わりを迎えます。地震や噴火をはじめとして自然災害が多い日本ですが、無茶々園のある明浜で特に警戒されるのが台風。四国は発達したままの台風が近づきやすく、傾斜地が多く海に面した明浜では、暴風雨に加えて土砂崩れや高波や高潮と、あらゆる台風被害が考えられる立地にあります。

明浜にとって柑橘栽培は消費者のみなさんとの接点であり、日々の営みの中心です。台風の影響からは逃れられず、60年から70年になる栽培史のなかで、程度の差はあっても毎年のように何らかの被害が出てきました。なかでも、1991年の台風19号と2004年の台風16号と18号は柑橘栽培に甚大な被害をもたらした、明浜の人達にとって苦い記憶として残っています。

この3つの台風はいわゆる“風台風”の代表格。1991年の台風19号は青森で収穫前のリンゴを落とした台風として知られ、2004年の台風は広島・厳島神社での被害や東北のコメの塩害が大きく報じられました。台風の進路に近かった明浜では暴風によって吹き上げられた海水が柑橘園に降り注ぎ、塩害によって果実の落下や落葉が発生しました。果実がダメになるだけでなく衰弱して枯れてしまう樹も多く、何年にも渡って生産量を落ち込ませ、産地を揺るがす大変な被害となりました。



【塩害で被害を受けたみかんの木】



【台風の進路図】

明浜で大きな被害を出した台風には、ルート、強さ、スピードに共通点があります。九州北部から中国地方へと進むルートが南風を発達させ、四国最接近時に950hpaを下回る強さによって暴風となり、一日で九州から北海道まで移動するスピードが雨雲を連れ去って風ばかり吹かせる。この3点が塩害をもたらした台風の共通点であり、ずっと明浜の目線で台風の進路と影響を観察していると、ひとつの要素でも欠けると深刻な塩害までには至らないようです。（ただし、樹の枝折れや倒伏、果実の生傷などの被害は毎度出てきます。）

今年も9月までに18個の台風が発生し、日本に接近・上陸した台風もありました。特に9月なかばの台風14号は前例がない危険な台風として警戒情報が発せられ、実際に九州を中心に被害も出ています。明浜にとって心配な予想進路でしたが、ルートと強さは先の条件に近かったもののスピードはそれほどでもなく、雨が降り続いたため最も恐れていた塩害には至りませんでした。

むしろこの台風は、夏から雨が降らず干ばつ状態にあった明浜のみかんには天恵となりました。8月、9月の2か月に降った雨のうちのおよそ8割が台風14号によるもので、雨不足をたった一日で解消して去ってしまいました。近くに高い山がなく夏の雨が降りにくい明浜では、雨は台風頼みとなることも少なくありません。私達にとって台風は被害と恵みも紙一重、厳しさと優しさの両面がある、人智を超えた身近な存在です。

# 川越家 オリヤ養蚕修理工事



【工事中の川越家 2022年10月】

今回は、無茶々園の生産者の一人である川越文憲さんの家で行われている「オリヤ養蚕修理工事」について紹介します。

現在、明浜町の段々畑では、主にみかんが栽培されていますが、かつては様々な作物が栽培されてきた歴史があり、時代によってその姿を変えてきました。江戸時代に盛んだったイワシ漁が明治時代に入り不漁となってしまったことにより、養蚕に活路を求めました。

段々畑では蚕の餌となる桑が育てられ、一説によると今では見慣れた段々畑の石垣も、この頃に桑の肥料が流れるのを防ぐ為に築かれたのが始まりだと言われています。しかし、時代が進むにつれ絹の価値は下がり、やがて桑は引き抜かれ、さつまいも畑や麦畑を経て現在のみかん畑へと変わります。こうして明浜町から養蚕業は姿を消しましたが、その名残は今でも残されており、それがオリヤ養蚕です。

オリヤとは居家または居屋と書きます。すなわち、住宅兼養蚕小屋のこと。構造は各家によって少し変わりますが、築100年を超える川越家では文憲さんの曾祖父の時代に木造一階建てだった家を二階建てにし、一階に居住し、二階で蚕を飼っていました。

# おかいこ様

蚕は家計を支える柱であったため、「おかいこ様」と呼ばれ大事に育てられていました。当時の構造は今もたくさん残っており、そのひとつに障子があります。蚕の飼育には通気性が重要視され、ガラス窓ではなく、障子だけがはめられていました。今でも家の一部は窓ガラスにはなっておらず、障子ははめているのみ。外との仕切りはなんと障子一枚で暮らしているというので驚きです。（ちなみに冬はとても寒いそうです。）



今、左下の写真、赤枠部分の垂れ下がってしまった庇の修復と一部の瓦の葺き替えが行われています。取材日には、家の周りに足場が組まれ、大工さんが丁寧な作業をされていました。大工さんの話では釘の位置まで元通りにするため、思った通りに作業が進まないそうです。この家は特浜の重要な景観に登録されているため「なるべく元の通りにすること」が求められ、通常よりも工期がかり約三か月を予定しています。よく見ると、いたるところに職人の技をたくさん見ることができます。

# 明日へ残す

貴重な文化物が多くある明浜町ですが、今、少子高齢化が進み、人口が急加速で減っています。このようなものをどのように残していくかが課題となっています。今ある家々もいずれは空き家になってしまうのでしょうか。いずれにせよ時代は変化していくものなのでその時代に合った使われ方がされるでしょう。ですが、価値の有無は今すぐには判断できないので、できる限り継承し、残していきたいものです。